

# 「いじり」を考える

廣瀬由衣

## I. 動機

今、若者の間でのコミュニケーション手段のひとつとして、「いじり」と呼ばれるものがある。「いじり」とは、簡単に言ってしまうえば相手をからかうなどして笑いものにするものである（とりあえずここではそう定義しておく）。私は、この「いじり」に大変関心を持っている。この「いじり」は、うまく使えば友達との関係を深めるのに役立つが、失敗すると逆に他人を傷つけることになりかねないからである。

私は、基本的に「いじられる」ことが好きだ、と思う。高校のときも、よく「いじられて」喜んでた。例えば、高校時代、私はある企業のマスコット（あまり可愛くない）に似ているとさんざんからかわれていた。ある朝学校に行ったら黒板にそのマスコットの絵が描かれており、その横に「ある日のYちゃん（私の頭文字）」といった注意書きが加えられていたりしたこともある。ただ、そのときも全く腹は立たず、むしろ「なんでこんなの描くのお〜」とそれを描いた張本人にじゃれつくことで、楽しい時間を過ごした、という気持ちがあるくらいである。私の中では、仲の良い友人間で行われる、愛情のこもったおちょくり、それが「いじり」というものであると捉えていた。友人関係を深めるツールのひとつであるとさえ考えていたのである。

しかし、ある一冊の小説を読んだことで、自分のこの定義に疑念が生じるようになった。その小説とは、木堂椎氏著「りはめより 100 倍恐ろしい」。タイトルは、『「いじり」は『いじめ』より 100 倍恐ろしい』という意味を持っている。作者は、現役高校生であり、この小説の原稿を携帯メールで書き青春文学大賞を受賞した話題になった作品だ。この小説の舞台は、とある高校のバスケットボール部。物語の中では、「いじられる奴」は、ニーズに応じて笑いをとる人気者ではあるが、その一方で、周囲から一段格下に見られる道化者として描かれる。タイトルが表すように、一見害がないように思われる「いじり」は「いじめ」より質の悪い、恐ろしいものとして捉えられているのだ。

この小説を読んで、「いじり」にどちらかというとプラスイメージを持っていた私は、大変考えさせられた。今まで私は、「いじられる」ことは周囲の人から「取り合ってもらえること」、「存在を認めてもらえること」、そしてそれは「愛されること」であると漠然と感じていたからである。しかし、「りはめより 100 倍恐ろしい」で行われている「いじり」、そこに愛を感じ取ることはできなかった。

「いじり」とは一体何なのだろう。良いことなのか、悪いことなのか。場合によれば、どういうふうに判断すれば良いのか。私を含め、誰もが、他人とより良い関係を築いて生きていきたいと願っている。その上で、「いじり」をどう捉えて、人と付き合っていくかは重要なポイントになるのではないかと思う。「いじり」の考察を行い、見つめなおすことで、私にとって今後他人とのコミュニケーション手段を再考することのできる有意義

な機会になるのではないかと思い、このテーマを選んだ。

## Ⅱ.対話を通して

### ①対話報告

今回、私は高校時代の友人Aと、このテーマについて対話することにした。彼女は他人を「上手に」いじるのが得意で、私も高校時代よくいじられていた。私自身は、人をいじるというより、いじられるタイプなので、私と正反対の立場にある彼女に話を聞くことで異なった視点を得られるのではないかと思ったため、対話をお願いした。以下がその対話内容である。彼女には、まず初めに動機文を読んでもらってから対話を始めた。

#### 「いじり」とは何か？

私：「いじり」っていうのは、やり方によっては人と人を近づけるコミュニケーション手段になると思うんだけど。どう思う？

A：それは私もそう思うよ。ある人をいじれるようになると、「この人とはうまくやっていけるな」という安心感が生まれる。

私：ということは、Aちゃんにとっても、「いじり」はコミュニケーション手段？

A：そうだね。

#### 「いじるか否か」の判断は？

私：でも、その人をいじて良いものかどうなのか、っていう判断って相当難しくない？中にはいじられるのが嫌いな人もいないじゃない。そういうのは、どうやって見極めているの？私はそれがすごく知りたいんだよね。怖くて、ついつい遠慮しちゃって、「いじり」の一步が踏み出せないんだよ。

A：う～ん。(しばらく考える) 私個人の意見としては、この世にいじられるのが嫌いな人はいないと思う。

私：えっ！それはないでしょ。実際、いじられるのが嫌いな人、いるじゃん。

A：それは、いじり方が間違ってるんだよ。プライドが高い人とかって、いじられるの嫌いそうだなとか思いがちだけど、そのプライドを満足させるようないじり方をすればいいんだよ。その人にあったいじり方っていうのがあるんだよ。

私：はあ～(嘆息)。すごいね。そんなスキル、私にはないよ(笑)。

A：スキルって(笑)。そんな難しくないよ。「りはめより100倍恐ろしい」、あれもそうだと思うんだよ。あれはいじり方を間違ってるよ。モテたい盛りの男子高校生にさ、女の子のいる前で下ネタも満載の道化役をやらせるっていうのは、どう考えても辛いよ。(注参照)その子のカッコいい部分を残してあげたいじり方が、他にあったと思うよ。

私：う～ん。例えばどんな？

A：う～ん。急に言われてもな(笑)。

私：・・・まあ、何となくはわかる。その人の自尊心を傷つけるようないじり方をしなけ

ればいいってこと？

A：そうそう。そんな、人の自尊心を傷つけるようないじりは、「いじり」じゃないよ。「いじめ」だよ。

私：じゃあ、「りはめより 100 倍恐ろしい」で「いじり」ってされていたのは「いじり」じゃないんだ。「いじめ」なんだ？

A：じゃない？ありゃ「いじり」の限度を超えてるよ。

私：おお。あの小説の前提が覆る（笑）。Aちゃんもさ、いじられるの、ありなの？なんか人をいじってばかりのイメージがある（笑）。

A：はあ！？そんなことないよ。私、高校時代も結構いじられてたよ（笑）。

私：あれ、そうだったっけ（笑）？

人を「いじる」上で大切なこと

私：でもさ、人のプライドを傷つけずにいじるのって案外難しいよね。

A：その人の価値観を知らないとね。

私：そうそう、その人が何を大切に思ってるかを知らないといじれなくない？ものすごくプライドが高い人もいれば、体を張った汚れ役で笑いをとることさえ厭わないで、それを「おいしい」って思う人だっているんだしさ（笑）。

A：そう、そういう人にはそういう人に合わせて少々ハードないじり方をしても大丈夫なんじゃない？

私：その人を深く知ってからじゃないといじれないってことだね。会ってすぐとかはなし。

A：まあ、時間の問題じゃないとは思うけどね。その人がわかってからじゃないとだめだね。

私：いやあ、すごいね。Aちゃんはさすがに「いじり」のプロだわ（笑）。

A：いや、こんなに「いじり」について考えたことは初めてだよ（笑）。

**(注)** 「りはめより 100 倍恐ろしい」・・・木堂椎の小説。

高校のバスケットボール部を舞台にしている。

物語の中では、「いじられる奴」は、ニーズに応じて笑いをとる人気者ではあるが、その一方で、女の子からはモテず、周囲から一段格下に見られる道化者として描かれる。

人気者であるがゆえに、問題が表層化せず、その意味で「いじり」は「いじめ」より恐ろしいものだという警告が、タイトルにはこめられている。

②対話を終えて

彼女によると、「いじり」は「その人のプライドを満足させる」ものであると言う。確かに、私は自分が某社のマスコットに似ていると「いじら」れているとき、格好悪いと思いつつも、周囲の人に注目されることで自分の存在を確認でき、良い気持ちになっていた。

そして、その「格好悪さ」は私の許容範囲内であった。すなわち、プライドを満足させられていたのだ。ここでいう「プライド」とは、単なる自尊心という意味ではなく、自分が価値を置いているもの、というふうに理解した方が良いと思う。つまり、私は某社のマスコットに似ているとはやしたてられる「格好悪さ」よりも、そのことで周囲に注目してもらえることに重きを置いたのである。すなわち、「その人の価値観を尊重できるか否か」ということが、「いじり」と「いじめ」を分かつ基準であると思う。

しかし、世間では「いじり」と「いじめ」の区別をこのようにしていないのではないかと思われる。多くの人にとって、「いじり」という名称自体は軽く、深刻な色合いを帯びてはいないものの、その内容については、軽度のいじめを「いじり」としている向きがあのではないのだろうか。確かに、そのように両者の区別をその程度問題に求めるという考え方があっても良いと思う。しかし、私は、「いじり」は「いじめ」と名称を異にしている以上、両者の持つ意味合いも異なって然るべきだと思う。それゆえに、私はその人の価値観を尊重できていないものは、「いじめ」にカテゴライズされるべきであると考えている。

「いじられる」私と違い、「いじる」側に立つことの多いAちゃんとの対話では、自分が思いもしなかった意見を聞くことができ、とても新鮮だった。特に、「世の中にいじられるのが嫌いな人はいない」という意見は、衝撃的であった。彼女は、人をいじる上で色々な可能性を感じているのではないだろうか、という印象を受けた。

### Ⅲ.結論

#### ①「いじり」とは何か？

対話を通して私が考えたことは、人をいじるという行為をプラスのものと捉えるか、それともマイナスのものと捉えるかは、その人の定義次第であるということである。ただ、先ほども述べたように、私は自分がいじられて楽しい時間を過ごした経験があるので、この論文でかきかっつきで論じる「いじり」については、その人の価値観を尊重した上で行われるコミュニケーション手段のひとつであり、ポジティブなものとして考えることにしたいと思う。

ここで一点触れておきたいのが、「いじり」の必要性についてである。講義の掲示板で、メンターの方に、「どうして『いじり』が必要なのかよくわからない」というご指摘をいただいた。十人いれば、十通りのコミュニケーション方法が存在するのが当然である。私も、友人関係を作るためには何が何でも「いじり」が必要であると主張しているわけではない。ただ、「いじる」ことができる間柄というのは、「冗談の言える」間柄であるということだと考える。多くの人にとって、そのような関係性は、両者の距離を縮め、コミュニケーションを円滑化する。やはり、「いじり」はコミュニケーション手段として考えられるひとつの方法なのだと思う。

#### ②「いじり」を「いじめ」にしないためには

「いじり」は、その人の価値観を尊重した上で行われるということが大前提である。し

たがって、「いじり」を適切なコミュニケーション手段として機能させるため、すなわち「いじめ」にしてしまわないためには、友人Aが対話で語っていたように、安易な「いじり」を控え、その人の価値観を知ることが重要である。その人の価値観を知るためには、本人としっかりと会話をしなければならない。「いじる」ためにはその人に歩み寄りねばならないという意味でも、「いじり」にはコミュニケーション促進の効果があると言って良いかもしれない。

### ③最後に

今まで、私は他人を「いじる」ことを恐れていた。下手にいじれば、その人との関係が悪化しかねないと考えていたからである。かと言って、「いじり」なしでは他人との距離が縮まらず、表面的な関係で終わるのではないかと、という危惧もあった。

しかし、今回このテーマを突き詰めて考えてみるに、私が他人を「いじることを恐れていたのは、その前提である、その人とコミュニケーションをとることを抜きにして考えていたからではないかと思う。他人をいきなり「いじる」のはいくら何でもリスクが高すぎる。きちんと相手と会話をし、本人の価値観を知った上で自然と出てくる「いじり」こそが、私の求めている愛のこもった「いじり」であると考え。そして、その「いじり」はますます両者の関係を深めてくれるツールになるだろう。「いじり」という名称自体は最近のものだが、このようなコミュニケーションは古くから私たち人間が行ってきたものなのではないだろうか。今後、いじられるばかりではなく、他人をいじることができるくらい、他人を知る努力をしていきたいと思う。

## IV.終わりに

今回、私は自分とは正反対で、「いじり」を得意とする友達と対話したが、自分と同じく「いじられ」がちな人にも話を聞いてみれば良かったかな、と感じている。「いじられ」キャラのサンプルは私ひとりで十分だと考えていたのだが、それではどうしても主観的になってしまう。その意味で、偏った内容になってしまった可能性は否めない。

ただ、今回、ずっと私が向き合っていた「いじり」という問題について、オンデマンドという適度な距離感のある講義で取り組むことができ本当に良かったと思う。自分の本音を晒すことにそう抵抗を感じずに済み、かつ受講者の方からの様々なリアクションを受け取ることができたからである。いただいたコメントを拝見するに、受講者の中には全体的に「いじり」を日常的なコミュニケーションのツールとして捉えている方が多く、それだけにこのテーマについて身近に感じ、関心を示してくださる方が多かったようである。

「いじり」は常に私たちの生活と共にある。今回のレポートでやり残した課題は、これから私が他人とコミュニケーションをとってゆく上で解消できたら面白いな、と思う。私と「いじり」との付き合いはまだまだ続きそうである。

以上

